

「お手玉」遊びに関する研究

橋 本 恵 子

I. はじめに

最近、「お手玉」遊びが世代間でどのように行なわれてきたかについて、簡単な聞き取り調査を行った。

その結果、60歳以上の女性の多くは、就学前から「お手玉」遊びに親しみ、さらにその後は、仲間と「技」を比べ合う遊びとして盛んに行っていた。50歳代では、僅かながらお手玉遊びに親しんだ人の数に減少傾向が見られたものの、人気のある遊びとして行われていた。しかし、40歳代から年代が下がるにしたがって「お手玉」を持ってはいるが、遊び方を知らないというものが多くみられた。

このように、団塊の世代といわれる50歳代までは、子ども達の間で「お手玉」遊びが盛んにおこなわれていたことが伺えた。

昭和30年代後半の日本における高度経済成長期を境に、子どもを取巻く環境は大きく変容し、「伝承遊び」への人々の関心はいつしか薄れ、忘れられていったように思う。

ところが、近年“子どもに遊びの復権を”と、かつて遊びの主流を成した「お手玉」遊びや「けん玉」遊びが注目されはじめた。

そこで、「お手玉」遊びについて明らかにし、今後の取組みについて考察を行う。

II. お手玉遊びの歴史

「お手玉」遊びの歴史は古く、3000年に及び、ギリシアではゼウスが楽しみエロスにも与えたとされている。古くは羊の距骨が使われ、ギリシアの大英博物館にはローマ時代のものと思われるものが保存されている。

当時は、成人女性の遊びであったが、古代エ

ジプトでは子どもの遊びとして行われていた。インドのセイロンではナツメヤシの実が使われ、その後シルクロードを通して中国へ運ばれた。日本に伝えられ時には、いつしか小石に変わり、「石なご」と呼ばれるようになっていた。

「お手玉」遊びが日本へ伝わったのは、奈良時代と推察され、当時は上流階級の遊びとして行われていた。平安時代には、一般の人々の遊びとして日本各地に広がり、江戸時代には小石に代わって、じゅず玉や胡桃などの木の実、貝殻や鈴、銭などを布製の袋に入れた「お手玉」が登場した。

布製お手玉は、当時穀物を入れる袋と同型の「かます型」、米俵の形の「俵型」、そして布製枕の形の「枕型」が作られた。

江戸後期から明治時代にかけては、四枚の布をはぎ合わせた座りの良い「座布団型」が全国各地に広まり、現在もこの形のものが主流をなしている。

「いしなご」から「お手玉」までの、呼び名や遊び方については、当時の歴史物語や風俗誌、歌集、随筆、辞書等の多くに記されている。

平安時代の源 順の漢和辞典『倭名類聚抄』には、「球」を空中に投げ上げる遊びであったようすが記されている。

江戸後期の喜多川守貞の風俗誌『守貞漫稿』には、「いしなごと云、今京坂地方にてはいしなごとりと云、女童集まり各々小石或二、或三つを集め一童之を持ち席上に抛蒔き、其数石のうち一石を取り、是を尺ばかり或いは二尺三尺に投げ上げ、落来る間に二石をとりて後、落る石を受け、席上の石とり尽くせば再び之を蒔、今度は三石づゝを取て落る石を受け、三四回之

に准ズ。七回に至りおわりとす。半に受過る時は次の童に譲る云々」などと、遊び方が具体的に記されている。

江戸中期の越山吾山の方言辞書『物類称呼』には、「石投(いしなご)、江戸にて手玉といふ。東國にて石なんご又なつこともいふ。信州軽井沢辺にてはんねいばなど云。出羽にてだまと云。越前にてなつごと云。伊勢にてをのせと云。中国及薩摩にて石なごといふ。」と各地方の名称が記されている。

明治時代の調査では、確認された名称だけでも200を越え、地方独自のものと合わせると膨大な数であった。

中でも「おじゃみ」の名称は、中国5県、九州、四国、東海、北陸、東京など、31県にのぼり、全国1位を示した。2位は「いしなご」で、秋田県、福島県、東京都、大阪府、三重県、兵庫県、愛媛県、徳島県、福岡県、佐賀県の10県があげられた。

今日、日本で唯一、「石なんご」の名称で小石をつかった「いしなご」遊びが兵庫県大屋町に残っている。

大正時代には、お手玉の中に小豆と一緒に足袋の“こはぜ”や“鈴”を入れ、音色を楽しむなどいろいろ工夫が施された。

しかし、昭和30年代後半にかけて、お手玉が人々の心から次第に忘れられていった。

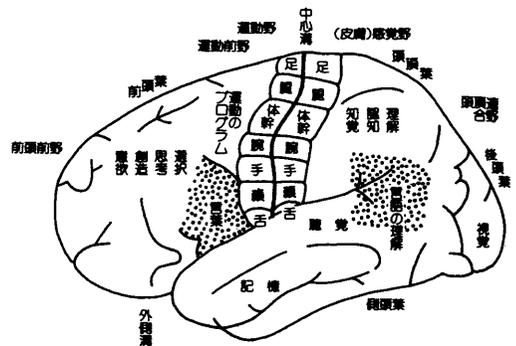
平成になって、お手玉を“後世に残そう”という気運が上がり、学校を中心に普及活動が展開された。そして平成4年「日本のお手玉の会」が発足し、毎年「全国お手玉大会」が開催されるまでになった。

Ⅲ. お手玉遊びの概要

言うまでもなく、「お手玉」遊びは手(主には指、手のひら)を使う遊びである。

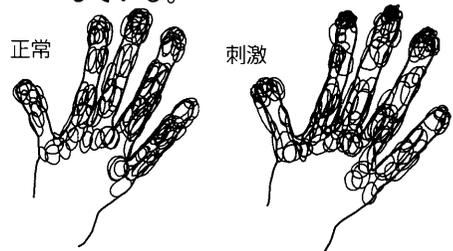
脳の中で、手の動きを支配する部分は、大脳の3分の1近くを占めている。そして、「ことば」をつかさどる部位と隣合せにあり、互いに刺激し合い促進し合っているといわれている(図1)。

図1 大脳の機能分布図



また、ジェンキンズらによるヨザルの動物実験から、指先の訓練を行うことで手の体性感覚野が拡大し、神経細胞が増えることが報告されている(図2)。

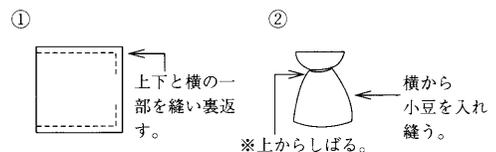
図2 実験の受容野を特訓刺激の前後で比較している。



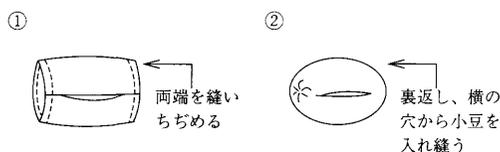
手を使う操作スキルの発達は、後々の複雑な運動スキルの獲得にも大きな影響を及ぼすことから、神経系の発達の著しい幼児期には、「お手玉」遊びに最適であると考えられる。

1. お手玉の作り方

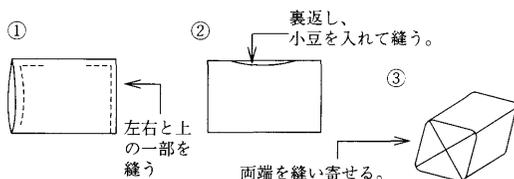
1) 「かます型」



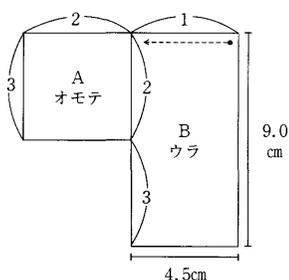
2) 「俵型」



3) 「枕型」



4) 「座布団型」



- 〈材料1ヶ分〉
 ・布A, B各2枚 (4.5×9.0cm)
 ※含縫い代
 ※布は木綿のもの
 ・小豆40g
- 〈縫い方〉
 ・糸は1~3まで切らないで縫う。
 ・番号同士を一緒に縫う。
 ・小豆を入れるために1ヶ所開けておく。
 ・縫い代は4mm位。
 ・待針を使うと仕上がり美しい。
 ・糸すこきを行い、縫い代には折りきせをする。

以上のように布製お手玉には4つの型がある。(1)のかます型は幼児にも簡単に作ることができる。

2. お手玉の遊び方

お手玉の遊び方には「振り技」系と「拾い技」系の2種類がある。

- 1) 「振り技」系は「突き」又は「ゆり」と呼ばれる。
- 2) 「拾い技」系は「取り」又は「よせ玉」と呼ばれる。

「振り技」系の「突き」又は「ゆり」は、決められた数のお手玉を片手あるいは両手に持ち、それを落とさないように交互に投げ上げ続

けて遊ぶ。

片手2個で行う場合は、必ず1個は空中に上がっていないなければならない。

立位で、数を競い合ったり、その時代の流行歌に合わせて行うことが多い。

「拾い技」系の「取り」又は「よせ玉」は、座位で、お手玉歌に合わせながら、投げ上げたり、摘んだり、手の甲にのせたり、一方の手の下をくぐらせたりと、幾つかの「技」を失敗するまで連続して行なう。

(1) ゆり (突き) 遊び

① 片手二つゆり

お手玉2個を片方(左右どちらでもよい)の掌に前後(指先側と手首側)に乗せる。

指先側のお手玉を頭の上(15cm位)に垂直に上げる。そのお手玉が頂点に達した時にもう一つを同じように投げ上げる(頭上高く手を上げて取りにいかない)。

これを繰り返す。

き、て以外も練習すると早く上達する。また、数回毎に手を替えて連続動作をすると早く上達する。

② 両手二つゆり

お手玉を両手に一個ずつ持つ。

右手のお手玉を高く投げ上げ、それが頂点に達した時に左手のお手玉を右手に送る(右手で取りに行かない)。

右手はそのお手玉を投げ上げる準備をする。同時に左手も上がっているお手玉を受け取る準備をする。

常に上がっているお手玉を見ながら同じリズムで繰り返す。

③ 三つゆり (突き)

お手玉を右手(左右どちらでもよい)に2個(指先側と手首側)、左手に1個持つ。

右手の指先側を高く投げ上げる。続けて右手の2個目を投げ上げる(投げ遅れない)。この時、左手はお手玉を右手に送り、すばやく最初に上げられた1個目のお手玉を取る。

右手は、左手から送られた3個目のお手玉を投げ上げる。お手玉は同じ方向に回るこ

になる。目は常に上のお手玉を見ている。
以上を繰り返す。

さらに高度な「技」として、三つゆりの中で、手元にある2個を2回入れ替えたり、左手を1度かい繰って受けたり、4個5個…とお手玉の数を増やしたりして、技術の上達に合わせて楽しむ。

(2)よせ玉(取り)遊び

奇数(5または7個)で遊び、5個の場合、親玉1個(色分けしたり、大きめに作る。)と子玉4個を使って遊ぶ。

はじめに、親玉を持つ手(右または左手)を決め、子玉4個は床にまく。

①「おさら」

始めに、「おさら」と歌いながら、親玉を空中に投げ上げ、それが床上に落下する間に床上の子玉(4個)を両手で一気に取り、落下する親玉をその上で受ける。続いて、その親玉を投げ上げると同時に、子玉(4個)を床に落とす。

※各「技」の終りにこの動作を行うことが多い。

②「おひとつ」

親玉を空中に投げ上げ、それが落下する間に床上の子玉1個を取り、落下する親玉を同じ手で受け取る。親玉は残し、その子玉を床に置く。この間「おひとつ」と歌いながら行う。②の始めから同様に繰り返す。最後の子玉(4個目)を床に置く時は「おとして」と歌い、最後に「おさら」と歌いながら①を行う。

③「おふたつ」

「おふたつ」と歌いながら行う。②と同様に行うが、1度に2個取る。

④「おみつつ」

「おみつつ」と歌いながら同様に行う。

⑤「ててのせ」

「ててのせ」と歌いながら、親玉を空中に投げ上げ、それが落下する間に床上の子玉1個を取り、もう一方の手の甲に乗せ、落下す

る親玉を受け取る。落とさないようしながら全ての子玉に乗せ、最後に「おとして おさら」を行う。

⑥「おはさみ」

「おはさみ」と歌いながら、親玉を空中に投げ上げ、それが落下する間に床上の子玉1個を取り、もう一方の親指と人差し指の間に挟み、落下する親玉を受け取る。同様に次々隣の指の間に挟んでいく。最後に「おとして おさら」を行う。

⑦「お馬ののりかえ」

「お馬ののりかえ」と歌いながら、右手の甲に親玉に乗せて、その手の親指と人差し指で子玉を1個摘み、親玉を落とさないようしながら、摘んでいる子玉を右手の上を越させる。同様に全て行ったら、「おさら」と歌いながら、親玉を手のひらで握る。(手の甲を上向きのまま行う。)

⑧「小さい川わたれ」

「小さい川わたれ」と歌いながら、左手の親指と中指を床につけてトンネルを作る。親玉を空中に投げ上げ、それが床上に落下する間に子玉を1個摘んで、トンネルをくぐらせ落下する親玉を受け取る。全部済んだら左手の掌を返す。その時全ての子玉が左側(左手の)にあればよい。

⑨「大きい川わたれ」

「大きい川わたれ」と歌いながら、左手の指先を床につけてトンネルを作る。親玉を空中に投げ上げ、それが床上に落下する間に子玉を全部摘んで、一気にトンネルをくぐらせ、落下する親玉を受ける。続いて親玉を2回投げ上げる間に「なか寄せ」、「つま寄せ」と散らばったお手玉を集めて「おさら」を行う。

⑩「おひだり」

「おひだり」と歌いながら、親玉を右手で投げ上げている間に、右手で子玉を投げ、左掌で受ける。(親玉、子玉とも頭上高く上げる。)同様にして全ての子玉を1個ずつ左の掌に乗せていく。

次に、「なかわかれ」と歌いながら、右手の親玉を高く投げ上げ、その間に左手の子玉の全てを右手に持ち替え、頭上に投げ上げると同時に、左手にある親玉をすばやく右手に移し、右手を体前の床に出す。この時、右手の左右に子玉が2個ずつ分かれて落ちればよい。

遊び方は動作のやさしいものから順に行っていく。(①から⑩の順で行う)。

その他、「おちりんこ」「大きい山」など、地方によって遊び方も多様である。

始めと終りの「おさら」の歌詞も、「おさらい」、「おさらり」と隣接した地域であっても歌われ方に違いが見られる。

「お手玉歌」の一例をあげておく

おひとつ おひとつ・・・おとして おさら
おふたつ おふたつ おとして おさら
おみいつ おとして おさら
おみんな おさら
ててのせ ててのせ・・・おさら
お馬ののりかえ・・・おさら
小さい川 わたれ・・・おさら
大きい川 わたれ
なかよせ つまよせ おさら
おひだり・・・なかわかれ

3. 乳幼児期のお手玉遊び

「お手玉」は、「手になじみやすい」、「変形しやすい」、「転がらない」、「安全」といった利点をいかして、「ごっこ遊び」や「的当て遊び」、「玉入れ」、「身体に乗せて運ぶ」、「積み木のように重ねる」、「色遊びや数遊び」と、乳幼児期から積極的に与えて欲しい遊具である。

乳幼児期には、感触(痛くない)、衛生面(洗濯可)から小豆に替わって「ペレット(プラスチックの材料)」を使用するとよい。

- ①「お手玉」を身体(頭・肩・腕・肘など)に乗せ、落とさないように運ぶ。
- ②「お手玉」を投げ上げる。上がっている間に拍手をして両手で受ける。
- ③「お手玉」を1個ずつ持ち、みんなで円陣

になって子どもの好きな歌(「げんこつ山のためきさん」など)に合わせて一斉に隣へ送る。リズム変化を加えると楽しさが増す。

- ④「お手玉」を「おせんべい」に見たて、一方の手の甲に乗せる。「おせんべ おせんべ 焼けたかな」と歌いながら、その手を返しておせんべいを受ける。それを、左右の手で落とさないように「アチチチ…」と投げ上げて遊ぶ。
- ⑤「お手玉」を1個ずつ持ち、二人組で向き合って座る。二人が同時に下から上に弧を描くように投げて交換する。最初は二人で1個からはじめるとよい。
- ⑥二人が向き合い、それぞれ「二つゆり」をおこなう。途中、合図に合わせて右手のお手玉を軽く投げ交換する。
※「二つゆり」を行う時、右手が左手のお手玉を取りにいかない。
以上「お手玉」遊びについて紹介した。

IV. おわりに

「お手玉」遊びは、長い歴史の中で伝承されてきた貴重な文化遺産であり、子どもの心身の発達を助長する効果的な遊びであることが分かった。

しかし、嘗ては子ども社会に定着した「お手玉」遊びではあったが、子どもを取巻く環境の変化からあまり遊ばれなくなり、今日では大人の関与が無ければ成り立たない遊びとなってきたように思われる。

また、親から子、孫へと受け継がれていった「お手玉」遊びは、共働きや核家族化などによる家族関係の希薄さから、次第に伝承の場を失ってしまった。

そして、20歳代から30歳代の親や保育者世代は、「お手玉」遊びの持つ「技」の獲得に向けた達成感や、仲間の中で出来映えを比べ合う緊張感や充足感など、遊びのもつおもしろさの体験が少なくなっている。

そこで、先に述べた布製「お手玉」を使って基本的な「技」を身につけ、遊びの楽しさを体

験する。さらに、子ども達が“真似てみたくなるような”習熟した「技」の獲得を目指していく。

これらのことが「お手玉」遊びの楽しさを子ども達に伝承していく上で、重要な課題であると考え。

参考文献

半沢敏郎『童遊文化史第1巻』東京書籍

中島 海『遊戯大事典』不昧堂

日本レクリエーション協会編

『遊びの大事典』東京書籍

大西伝一郎『お手玉』文溪堂

田中邦子『お手玉しましょ』一声社

久保田競『発達No50』ミネルヴァ書房

斎藤良輔『おもちゃの科学』小峰書店

原田硯三『群れ遊び』のすすめ 黎明書房

(助教授)